泉水穂のいまどき恋愛講座

あとひと月ほどで29歳になる私は、「あと1年で30かぁ」と感慨深く溜め息をつく間もなく、とにかく20代のうちにやっておきたいことを、全てクリアしようと仕事に遊びに走り廻っている。

ここで私が「もう30か」と決して溜め息をつかないのは、私自身、30代が女として最も光輝くことができる女ざかりだということを知っているからである。

ところが、多くの女性たちが30代を「もうオバサン」と決めつけてしまうどころか、もっと早い段階で、何かを諦めてしまっているのは、どうしたことだろう?

友達の中にも、結婚して、子供を産んで、子供の成長だけが生き甲斐になってしまっていて、「私はもう、女を捨てたわ」とさえ公言してしまう女性たちがいるけれど、私はそんな時、「もったいない!まだまだ、これからじゃないの」と悲しくなってしまう。

しかもこの現象は、お母さんになった女たちだけでなく、意外なことに、20代前半の女のコたちの中にも見つけられるのだ。かく言う私も、大学を卒業して、広告プロダクションに就職して間もない頃、「ああ、私の青春ももう終わった」と、楽しかった日々に幕を下ろそうとしていた時代があったのだ。周囲の女のコたちも、みんなそんな感じだった。

ところが!私はある日、気づいたのである。なーんにも終わってなんかいない、私の人生、これからだわ!てね。

もしもあのまま「私の人生、これで終わり」なんて見切りをつけた上で、子供を産んでいたら、今頃、我が子の「お受験」に命をかけるママになっていたかもしれない、と思う。

もちろん、結婚することも、子供を産むことも、一度はやってみるべきだと思う。けれども、自分の人生を諦めた挙げ句、『あとは適当に結婚して、子供でも産んで』という投げやりな考え方でやってしまうのは、あまりにも情けない。

そういう妻は、30代の興味を夫の出世と子供の進学に注いではいるが、ある日ふっと鏡を眺め、「私はこのまま女として終わってしまうの?」という漠然とした焦りが芽生え、思いつきでテレクラに電話をしてしまい、ちょっとした興味から出かけていき、10年ぶりの口説き文句にあっさりとひっかかって、場末のラブホテルで午後の情事を行なう。そこで賢い妻ならまだ割り切って楽しむかもしれないけれど、あまりにも男に免疫がなかったために、いっきに『離婚&駆け落ち』へとまっしぐら、というケースも少なくないのである!

このコラムを読んでいる若い女のコたちは、「そんな馬鹿な!」と笑い飛ばしてしまうかもしれないけれど、あなたがそれこそ『適当に結婚して、適当に子供でも産んで』なんて考えのもとに結婚したとしたら、そんな投げやりな女は全然魅力的なんかじゃないということ、つまりは今のように男たちから誘われたり、口説かれたりなんて全くなくなってしまうのだということ、その結果10年後に、(今のあなたなら、吐き気を催してしまいそうな)ブ男から声をかけられても、この世の春とばかりにウキウキしてしまうのだということ、そういう危険が潜んでいるということを、絶対に忘れてはいけないのである。

私の大親友がついこの前、女の子を出産した。『適当に結婚して、あとは子供でも産んで』という考えではなく、仕事さえしていないけれど、自分の趣味を充実させ、たくさんの本を読み、多くの映画や絵画を鑑賞し、常に視野を広く持つことを心がけている彼女は、妊娠中もそれはそれは美しかった。趣味の悪いマタニティドレスなど一切着ず、ショートヘアにすることなく、長い髪のキューティクルも健在で、いつもきちんとメイクアップをしていた。つまり彼女は、妊娠中でも女であることを捨てなかったのだ。そして、多くの女性たちは、妊娠した途端、女であることを捨てて、すぐさま母親になってしまうため、メイクをしなくなる。

メイクはそんなに大事か?大事である。女が化粧をせずに、外出するようになったら、それは『女を捨てた』ことを意味する。つまりは、数年後にテレクラで男に口説かれてしまう転落の始まりなのである。

まだまだ先のこと、なんてタカをくくっていないで。もし、あなたの中でももう「あきらめ」が始まっているとしたら、要注意。人生これから、と前向きに考えられる女の人生には、ホントにまだまだ素敵なことがいっぱい起こるものなのである。

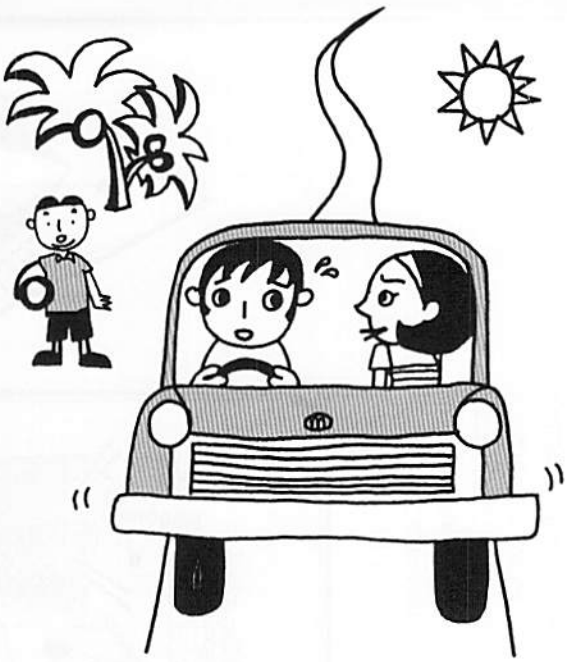
マンボカーパラダイス

女の子の本音

春になって新しい環境にも慣れて、バリバリに仕事している人もいれば、今までの自分を否定するかのごとくナンパしまくっているような人など、この時期様々な人間ドラマがあります。自動車教習所へ通って免許と彼女をいっしょに手に入れるなんてこても貧しそーな人っているでしょう。街中でも、なんでこんな奴がこのクルマに乗っているの?っていう光景よく見かけるでしょう。要はその人にあったクルマに乗って、女の子だって納得するというもの。自分が欲しいクルマと自分に似合うクルマというのは、全然違うってことをこの際わかってちょーだい。世の中はRVだの、四駆だのといってますが現在進行形の恋愛中でこれからクルマを手に入れようとしている人は、いっそ彼女と一んであるクルマなんて最近よく見かけますが、隣に女の子が座っていたことはありません。また駐車場でスカイラインやローレルの土足厳禁のクルマなんか、まだいたのかって感じでお目にかかります

MARUOKA IZUHO

プロフィール 1965年生まれ。
同志社女子大学卒。(株)電通プロックス勤務を経て、現在コピーライター。広告のほかFMラジオ番組のシナリオや出演もこなす。著書に「ありふれた無邪気が罪になる」(PHP研究所)、「キスまで、待てない」(大和書房)など。



イラスト：佐藤アモール陽子

着倒れ京都人に送る。ササイな情報 ⑫

PARADISE YAMAMOTO

ともさほど珍しくありません。会社の新人研修で張り切り過ぎてケガをする奴、しかしそんな人間的で間抜けな奴に同情して好意を寄せてくる新入社員一のカワイイ女の子など、例外と呼ばれるような出会いがおこるのもこの時期ならではのことです。

そしていよいよこれからの季節は、女の子を助手席に乗せてドライブに出かけるチャンス。喫茶店やカラオケでデートしている場合なんかじゃないよ。2人っきりになれる空間なんて、なんてったってクルマだよ。巷にあふれる恋愛マニュアル雑誌のクルマ特集なんてあてにすると痛い目にあうから気をつけてね。女の子は見抜いているのよ。似合わないクルマに乗ってくる奴の程度なんか。軽自動車に乗っていたってピンポーに見えない人もいれば、携帯電話片手にBMW乗っていい

緒にクルマ選びをしてみてはいかが。彼女がこんなクルマに乗ってほしいというチョイスはまんざらハズレていないはずです。もしあまりに二人の間で、趣味がかけ離れているようであれば、それは二人が一緒にいるということも自然の摂理に反しているということなのです。早いうちにすんなりと別れたほうがいいでしょう。二人が一台のクルマを選ぼうとするとき、二人の運命は決まってしまうということなんです。一台のクルマにいきついて「このクルマが好きな二人だからきっとうまくいくよね」となればイイわけです。

すでにクルマを持っている人も、女の子から見てヤメテーというようなクルマに乗っている限り春は来ないでしょう。アンパンマンや、ケンケンなどのUFOキャッチャーでとったぬいぐるみがこれみよがしに何十個も積

が、これもやめて欲しいものです。

でもなんといっても最も女の子に嫌われるのは、女の子より運転が下手な男です。

【プロフィール】元東京パノラママンボボーイズのリーダー。富士重工業デザインセンターで、カーデザイナーとしても活躍していた初代レガシーツーリングワゴン、アルシオーネSVXなどのデザインを手掛ける。4月から始まった新番組、土曜夜7時からの『テレビの王様』（TBS系）でもマンボなコラムニストとして活躍中。マンボ画家ソリマチアキラといっしょの東京ラテンムードデラックスも現在ツアー中。

NODA TATSUYA

前号に引き続きパリ日記。パリでオフの時間が取れても、シャンゼリゼやサントノーレ辺りをあらためて歩こうなどという気はまず起こらない。いつもこの時とばかりに、中古レコード屋か古本屋のはしごで日が暮れてしまう。しかしながら、ついつい洋服に目がいってしまい、レコードを探しに行ったハズのモントルイユの蚤の市で、エマニエル・ウンガロの1970年のデッドストックのカフタンのレディスのコートにフラフラと魅きつけられる。夢遊病者のように買ってしまったものの、果たして誰が着るのやら。

そのままバルベスでセネガルの生地とマリのアクセサリーをお土産用にあさり、ベルヴィルのアルゼンチンレストラン（これが旨い）で夕飯を食い、近くのセネガルレストランでブラックディスコクィーンのダンスがあると、地元のパリジャンが言うので出掛けると「今日はラマダン（イスラムの断食）だから、パーティはない」とのこと。ガッカリする間もなく、とりあえずやたら甘いパンチをガブガブ飲んで、次なる秘密のクラブへ出掛けると、普通の家。

ノック3回、内側から鍵が開くと、アンティル諸島出身の小柄な主人が愛想よく出迎えてくれる。近所の仲間らしきのがダイニングで飯を食っている脇を地下に降りると、ズークが大音量でかかっている。バーカウンターでひたすら見たこともない銘柄のラム酒を飲んでいると、「アレ？」どこかで見た顔の一団。背の高い男の首に、見覚えのある鷲のタトゥー。2日前にロンドンで取材したニュールネッサンスのハーヴェイとキャロリンじゃない。「パリで何やってんの？」とお互い驚くが、どちらもベロンベロンで要領を得ない。

このニュールネッサンスというチーム。ロンドンのクリエーター集団で、コスチューム、アクセサリー、眼鏡、グラフィックまで、すべて自分たちで最後までやってしまう。さしずめ、ロンドンのピエール&ジルといったところ。2年前にロンドンのブティック・ジョーンズのウインドーを彼らの作品が飾っていて、その手の込んだ仕事にビックリ。今年はロンドンコレクションでショーもやったが、そのほとんどは一点モノ。フォトカードを重ねコラージュしたロングドレスなんて、気の遠くなるような作業が頭に浮かぶ。年2回のコレクションはとてもじゃないが出来る作品じゃない。彼らもその辺りは分かっていて、コマーシャルの仕事などを積極的にやっているよう。次のコアントロー（リキュールね）の広告は、ピエール&ジルとのコンペに競り勝ったらしくて、喜んでいた。なぜか、その彼らとハイチのリズムで騒いで解散。この「Le Corail」というアンティルのクラブでお金を払った記憶がない。後で一緒に行ったパリジャンに聞くと、日本人の客は初めてらしくて、マスターのルルがロハにしてくれたらしい。なぜかこの店のカードがポケットに沢山入っているなぁ、と次の朝思っていたら、日本で友達に渡してくれということだったらしい。ズーク、ヘイシャンの好きな人は、パリへ行ったら寄ってください。住所は7 Rue Henri-Chevreau 47979717。午前2時でも飯が食えるからベルヴィルはご機嫌。ブノンペンという名の汁そばがまた旨い。デザートにバナナのフライを中華料理屋で食っていると「よし今からカスバ（クラブ）へ行こう。あそこにニナ・ハーゲンと結婚したゴルチェのブレスの友人がいるハズだ」とパリジャンは元気だが、その後の記憶はきれいに消えている。

プロフィール 1959年京都生まれ。流行通信社・WWDジャパン編集部デスク。東京中心のファッション情報のなかで関西に留まり、10年以上にわたり世界の服飾産業を見続けている。91年より大阪コレクションの選考委員として、海外、新人のデザイナーのショーもサポート。